



NEO-SYMPHONIC JAZZ at 芸劇 マリア・シュナイダー plays マリア・シュナイダー

NEO-SYMPHONIC JAZZ at Geigeki Maria Schneider plays Maria Schneider

マリア・シュナイダー、待望の来日公演

挟間美帆がプロデュースする「NEO-SYMPHONIC JAZZ at 芸劇」に
現代ジャズ最高峰の作曲家、マリア・シュナイダーが登場！



©Nagamitsu Endo



©タクミジユン

今年4月にTBS系テレビ『情熱大陸』に出演し、ジャズを普段聴かない層からも注目を集めている挟間美帆。グラミー賞にもノミネートされた彼女が2019年から力を注いでいるのが「NEO-SYMPHONIC JAZZ at 芸劇」である。2022年は中村佳穂、2023年にはAwichと、ライブやフェスで人気の実力派ミュージシャンがゲストとして圧倒的なパフォーマンスを聴かせ、コンサートホールに普段来ない若い客層をも惹きつけている。

挟間は今回も引き続きプロデューサーを務めているが、今年限定で主役となるのは彼女が「神格的存在」と賛辞を惜しまないマリア・シュナイダーだ。グラミー賞に7度も輝いた現代のジャズを代表する偉大な作曲家である。挟間をして「マリアのオーケストレーションは真似ができなくて、ビッグバンドでもまるで弦楽セクションがいるように聴こえるんですよ。しかも自分のバンドではない管弦楽で演奏されてもやっぱり彼女独自の音になるんです」と畏敬の念を禁じ得ないほどののだ。

7年前の来日では自らのビッグバンドを率いてブルーノート東京で熱演を披露したが、連日

ほぼ満員。長年のジャズファンのみならず20～30代とおぼしき若い客層がこぞって集まっているのだが、彼女が今回初めて日本のミュージシャンによるラージアンサンブル(ビッグバンド)と室内オーケストラを指揮することにも注目が集まっている。

前半にマリアと共演するのは、トロンボーンの池本茂貴いるisles(アイルス)。池本は学生ビッグバンドの名門である慶應義塾大学のライト・ミュージック・ソサイエティのコンサートマスターを務めて2015～17年のYAMANO BIG BAND JAZZ CONTESTで3連覇。学生時代からマリア・シュナイダーや挟間美帆の楽曲を演奏していた世代で、現在は自身のグループislesで日本のビッグバンドの歴史に新風を吹き込んでいる。

後半は22名の弦楽を擁する特別編成の室内オーケストラ。東京フィルの首席フルート奏者・齋藤和志と、挟間美帆m_unitの日本公演で第1ヴァイオリンを担うマレー飛鳥がとりまとめた豪華メンバーは、様々なジャンルに対応可能な顔ぶれ。m_unitからはピアノの佐藤浩一、そして弦

楽器メンバーも勢ぞろいする鉄壁の布陣だ。

曲目はデビューアルバム『Evanescence』(1994)からデヴィッド・ボウイの影響を受けてダークな雰囲気をもった『Data Lords』(2020)まで、様々な年代から選曲されているのでマリア・シュナイダーの多彩な側面が味わえそう。しかも後半の室内オーケストラでは、マリアの名曲を挟間が管弦楽に編み直して新たな色彩を加えるという。

そしてメインプログラムとなる「Carlos Drummond de Andrade Stories」は、グラミー賞で通例、現代音楽の作品に贈られる部門を勝ち取った記念碑的なアルバム『Winter Morning Walks』(2013)に収録された歌曲集。挟間が「本当に名作で、もっと再演されるべき」と絶賛する作品が、マリア自身の指揮で日本初演されるのだから絶対に聴き逃さない。初演ではドーン・アップショウが歌っていたソプラノパートを、アメリカのメトロポリタン歌劇場など世界の檜舞台で輝かしい歌声を披露してきた森谷真理が務めるというのも実に楽しみだ。

取材・文：小室敬幸(音楽ライター)



7月27日(土) 17:00開演
コンサートホール 詳細はP07へ

出演：マリア・シュナイダー(指揮・作曲)
森谷真理(ソプラノ)
特別編成チェンバー・オーケストラ
池本茂貴isles(ラージ・アンサンブル)
※挟間美帆は出演いたしません
曲目：Carlos Drummond de Andrade Stories
※日本初演 ほか



2024年度 全国共同制作オペラ 東京芸術劇場シアターオペラvol.18

プッチーニ／歌劇『ラ・ボエーム』

(全4幕／イタリア語上演／日本語・英語字幕付き／新制作)

Tokyo Metropolitan Theatre Opera vol.18 “La Bohème”

Inoue Michiyoshi



Moriyama Kaiji

©Yuriko Takagi

©Sadato Ishizuka

井上道義が盟友と共に魅せる “最愛”にして“最後”のオペラ

芸術の都パリを舞台にしたボヘミアンたちの愛と青春のオペラ『ラ・ボエーム』。
全国7都市で名コンビがおくるイマジネーション豊かな新制作の舞台がここに開幕。

2024年秋、全7館による全国共同制作オペラ『ラ・ボエーム』が東京芸術劇場で幕を開ける。今年没後100年を迎えたイタリアの大家プッチーニの『ラ・ボエーム』は、パリの屋根裏部屋に住む若き芸術家たちの哀愁を描いた青春群像劇。名旋律が全編を彩る抒情的かつ劇的な傑作で、「冷たい手を」「私の名はミミ」「私が街を歩けば」など有名アリアも数多い。作品自体は、「オペラのABC」(A=アイダ、B=ボエーム、C=カルメン)に挙げられるほど親しみやすく、ビギナーもリピーターも必ずや感動に誘われる。

しかも今回は、見逃せないポイントが2つある。1つ目は、2024年末での引退を宣言している名指揮者・井上道義が取り組む“最後のオペラ”であること。井上は、全国共同制作オペラの『フィガロの結婚』『ドン・ジョヴァンニ』をはじめ当分野での実績も十分だ。その彼が最後に選んだのが「最愛のオペラ」と語る本作。引退発表後の井上は、様々な楽団と一期一会的な凄演を続けているので、生気と躍動感に富んだ生来の表現に、円熟味と「最後&最愛」の思いが重なる本公演は、渾身の名演必至。ぜひとも耳に焼き付けておきたい。

もう一つは、舞踊家・演出家の森山開次が演出を受け持つこと。井上が深い信頼を寄せる彼は、オペラ初演出となった当シリーズの『ドン・ジョヴァンニ』(2019年、指揮：井上)に続いて、

演出・振付・美術・衣裳デザインを担当。今回の演出にあたって「私の芸術の灯火を捧げて取り組む」と意気込みを語っており、現代のダンスシーンを牽引しながら、東京2020パラリンピック開会式など様々なプロジェクトに携わっている才人ならではの、創造性とイマジネーションに溢れた舞台が期待される。

歌手陣も、二人がオーディションで選んだ内外の実力派がそろそろ。主役の詩人ロドルフォは、井上作のミュージカルオペラ『A Way from Surrender～降福からの道～』で井上の分身たるタロ役を務めた工藤和真。新世代テノールの筆頭格の歌声は必聴だ。ヒロインのミミは、欧州の著名歌劇場で活躍し、今年1月英国ロイヤル・オペラにミミ役でデビューして絶賛されたソプラノ、ルザン・マンタシャン。その演唱も注目度が高い。また、豊かな声と表現力を持つ池内響のマルチェット、艶やかでチャーミングな中川郁文のムゼッタ以下、充実の顔ぶれが並ぶ。なお今回森山は「マルチェット役に画家・藤田嗣治の視点を重ねる」との由。この点も極めて興味深い。加えて読売日本交響楽団の出演も特筆もの。日本屈指のゴージャスで重層的なサウンドは、管弦楽も重要なプッチーニ・オペラにおいて実に心強い。

井上&森山による『ドン・ジョヴァンニ』は、踊りを取り入れた清新な舞台だったが、感心し

たのは、音楽が損なわれず、むしろ引き立っていた点。この特別な『ラ・ボエーム』も、「新しく、美しく、深い」上演となるに違いない。

文：柴田克彦(音楽評論家)



9月21日(土)、23日(月) 14:00開演
コンサートホール 詳細はP11へ

指揮：井上道義
演出・振付・美術・衣裳：森山開次
出演：ミミ/ルザン・マンタシャン
ロドルフォ/工藤和真
ムゼッタ/中川郁文
マルチェット/池内響
コッリーネ/スタニスラフ・ヴォロビョフ
ショナール/高橋洋介
ベノア/晴雅彦
アルチンドロ/仲田尋一
バルビニョール/谷口耕平

ダンサー：梶田留水 水島晃太郎
南帆乃佳 小川莉伯

合唱：ザ・オペラ・クワイア
世田谷ジュニア合唱団
管弦楽：読売日本交響楽団
バンド：バンダ・ペル・ラ・ボエーム

宮城、京都、兵庫、熊本、石川、神奈川公演あり
<https://la-boheme2024.jp/>



©URUZTE ZHURAV



©TAKAWA JUNZO



©FUKUSHI K



©TAKARAKE